（様式第１号）（第２条 16 号関係）

別紙

福祉サービス第三者評価の結果

１　評価機関

名称： コスモプランニング有限会社	所在地： 長野市松岡１丁目 35 番５号
評価実施期間： 令和３年７月 28 日から令和３年 12 月 22 日まで	
評価調査者（評価調査者養成研修修了者番号を記載） Ｂ１８０１４、０５０４８２	

２　福祉サービス事業者情報（令和　３年１０月現在）

事業所名： （施設名）　長野市鬼無里保育園			種別： 保育所
代表者氏名：　市長　荻原　健司 （管理者氏名）　保育・幼稚園課長　島田　みち代			定員（利用人数）：　60 名（11 名）
設置主体：　長野市 経営主体：　長野市			開設（指定）年月日： 平成 7 年 4 月 1 日
所在地：〒 381-4301 長野県長野市鬼無里１６０－４			
電話番号： 026-256-2582			FAX 番号： 026-256-2582
電子メールアドレス　：　—			
ホームページアドレス：　http://www.city.nagano.nagano.jp/			
職員数	常勤職員：　6 名	非常勤職員:　11 名	
専門職員	（専門職の名称）　名		
	・園長　1 名	・保育士　10 名	
	・保育主任　1 名	・給食調理員　5 名	
施設・設備の概要	（設備等）	（屋外遊具）	
	・乳児室　…　1 室 ・ほふく室 …　1 室 ・保育室　…　2 室 ・遊戯室　…　1 室 ・調理室　…　1 室 ・事務室　…　1 室 ・便所　…　3 室	・2 間鉄棒 ・滑り台	

３　理念・基本方針

○長野市保育理念（保育所型認定子ども園を含む）

子どもの健やかな心身の発達を図り、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う。

○児童福祉法に基づき、保育を必要とする子どもを保育することを目的とする。

○子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進する。

○長野市保育基本方針

○安全で安心できる生活の場を整え、子どもが自己を十分に発揮できるようにします。
○専門の資格を持った職員が養護と教育を一体的に行い、子どもの発達を援助します。
○保護者の気持ちを受け止め、共に子育てをします。
○家庭と連携を図りながら、子育ての悩みや相談に応じ助言するなど、地域における子育て支援の拠点として、社会的役割を果たします。
○保育を実践するにあたっては、「全体的な計画」に基づき、一貫性を持って子どもの実態に応じた柔軟な保育を展開します。

○鬼無里保育園　保育方針

・1人一人の子どもを温かく受け止め安心して自分の思いを表せるように保育します。
・恵まれた自然と関わる中で、感動する心、探求する心を育て、丈夫な体を作ります。
・異年齢混合保育と地域の人や高齢者との交流の中で、豊かな人間関係を育てていきます。
・家庭と連携し保護者と共に子育てをします。

○鬼無里保育園　保育目標

・自分の思いを伝えられる子ども。
・挨拶ができる子ども。
・思いやりをもてる子ども。

4　福祉サービス事業者の特徴的な取り組み

当鬼無里保育園は長野市が直接運営する28園(内休園2園)のうちの一つで、平成17年1月に旧鬼無里村が長野市に合併されて以降、長野市が運営している。

昭和27年旧鬼無里村に初めて季節保育所が開設され、昭和31年にはお寺を借用した中央(120人)、神社を借用した上里(88人)、稚蚕飼育所を使った両京(66人)の3季節保育所が、農繁期を主にした15日から20日間程度開設されたという。その後、昭和41年11月に3季節保育所が常設季節保育所となり、昭和42年4月に先ず中央保育所が正式に保育所となり他の2園も順次保育所として認可された。平成7年4月には3保育所を統合し鬼無里村立保育園として運営されてきた。

平成5年前身の中央保育所が高齢者生活福祉センターとの複合施設として現在の鬼無里保育園の建物に新築移転された経緯があり平成7年4月の3園統合時から現在の場所で運営がされ、平成17年1月に旧鬼無里村が長野市と合併したため、その後は長野市の一保育園として引き継がれている。

長野市鬼無里地区は長野県西北部、妙高戸隠連山国立公園に属する戸隠山の南西方面に広がり、長野市と白馬村にまたがる標高 650m の中山間地で、また、長野市中心部に注ぐ裾花川の源で、裾花渓谷を西に向かい白馬村方面に車を走らせると谷が開け鬼無里盆地となり、周囲を荒倉山、虫倉山、戸隠表山などに囲まれている。鬼無里地区には飛鳥時代（あるいは白鳳時代）、鬼無里に遷都の計画があったとされる伝承があり、白髯神社や両京地区周辺の地名、旧跡には京都に由来する多くのものがあり、その最たるものが「鬼女紅葉」で北信州一円を舞台とし、会津、京都、鬼無里、戸隠、別所温泉などを舞台とする能の代表的演目「紅葉狩」としても有名で一般的な伝承については紅葉伝説となり、主人公の「紅葉」は妖術を操り、討伐される「鬼女」であるが、鬼無里における伝承では医薬、手芸、文芸に秀で、村民に恵みを与える「貴女」として描かれている。

現在、鬼無里地区の人口は1,200人(令和3年12月1日現在)ほどで平成17年の長野市合併当初の2,180人と較べると980人ほど少なくなっている。世帯数も610ほどで合併当初の830から減少しており少子高齢化がかなり進んでいる。そうした中、当保育園は地域唯一の保育園として住民の

方の関心も高く、地域の宝物として一人ひとりの子どもが大切にされている。
当保育園の東隣の地続きには鬼無里小・中学校があり、近くには長野市役所鬼無里支所や鬼無里診療所、ふるさと資料館、地場産品の直売所などもあり鬼無里地区の中心部を形成している。
当園では長野県が進めている「信州やまほいく認定制度(信州自然型保育認定制度)」の認定園として「豊かな自然と温かな地域の中で、子どもたちの”人生の根っこ”を育みます」という活動を推進しており、遊戯室と保育室の間の壁には当園を中心としたお散歩マップが掲示され、いくつかの散歩コースからは周囲の山々と裾野を流れる裾花川、田畑を眺めることができ、天候に関係なく、毎日、園外に出掛け、かつては海あるいは湖であったという鬼無里の立地を生かし、四季折々の自然や動植物に親しみ、また、地域の人々とふれあい様々な社会体験や生活体験をしている。
現在、当園には1歳児1名と2歳児2名のひよこ組、3歳児1名・4歳児5名・5歳児2名のぱんだ組の二つのクラスがあり、それぞれの発達段階に合わせて作成された令和3年度「全体的な計画」の四つの「保育方針」に掲げた「1人一人の子どもを温かく受け止め安心して自分の思いを表せるように保育します」、「恵まれた自然と関わる中で、感動する心、探求する心を育て、丈夫な体を作ります」、「異年齢混合保育と地域の人や高齢者との交流の中で、豊かな人間関係を育てていきます」等に沿い、「自分の思いが伝えられる子ども」、「挨拶ができる子ども」、「思いやりが持てる子ども」という当園の保育目標の実現に向けて職員が一人ひとりの子どもを受容し、心身共に健やかに育つように熱心に取り組んでいる。
また、当園では保護者の仕事と子育ての両立等を応援するためそのニーズに合わせ多様なサービスを提供しており、長時間保育や一時預かり、障がい児保育、おひさま広場等を実施している。長時間保育は短時間利用者が時間外保育を必要とする際に利用するサービスで、利用している保護者は全体の 90%となっている。また、一時預かりについても保護者の就労・保護者の疾病・保護者の育児に伴う心理的、肉体的負担の解消等による預かり保育を行うサービスで当園でも希望に応じて支援している。障がい児保育は保育を必要とする心身に障がいを持つ子どもの保育を行うサービスで、園児との遊びや給食を通して子ども同士の交流を行い心身の発達を促すという内容になっている。おひさま広場は未就園児と保護者対象に園開放及び子育て相談を行うサービスでいつでも受け入れることができるようになっているが、地域の実情から参加者が少ないという状況が続いている。
当園では長野市教育の基本理念である「明日を拓く深く豊かな人間性の実現」につながる「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」に連動した園としての具体的な保育方針を策定し園目標とともにその実現を目指し活動している。また、「第二期長野市子ども・子育て支援事業計画」に沿った今年度2021年度からの中期計画として6年目に入る「信州やまほいく」の充実や長野市運動プログラムの充実などを掲げ具体的に進めており、小規模園ならではの地域の人々との交流や地域の身近な自然や動植物などの環境を活かした様々な活動を通じて子どもたちの将来に向けて「生きる力の基礎力」を育成すべく、まさに少数精鋭の職員が地域唯一の園を継続しようと真剣に取り組んでいる。

5　第三者評価の受審状況

受審回数（前回の受審時期）	今回が２回目(平成３０年度)

6　評価結果総評（利用者調査結果を含む。）

◇特に良いと思う点

1) 周りの自然などの環境を活かした保育
当保育園の保育指針の一つとして「恵まれた自然と関わる中で、感動する心、探求する心を育て、丈夫な体を作ります」とし、自然に囲まれた中山間地に位置し、また、過疎化が進み、園児数が 11 名となる中、豊かな自然を保育に取り入れ四季の鮮明な移ろいの中で子どもたちと職員が過ごしている。
当園は信州やまほいく(信州自然型保育)の認定を受け、戸外活動の機会を多く取り入れ、散歩

に出かけ、春は田畑で草花（つくし、のびろ等）や小動物（オタマジャクシ、カブトムシの幼虫など）を見つけ、夏は泥んこ遊び、水遊びを楽しみ、秋は紅葉や実り（栗拾い、ドングリ、アケビ等）の自然の変化に気づき、冬は厳しい寒さの中、雪遊びやそり遊びを楽しんでいる。

子ども達は四季折々の変化を身近に感じ、しっかり歩くことで体力の向上に繋げ、自然物を保育に取り入れ飼育や制作を行い、心身ともに成長している。散歩には幼児と未満児一緒に出掛けることもあり、異年齢での思いやり、助け合いや学びが育っている。園の畑にはジャガイモ、さつま芋、玉ねぎ等の苗を植え、園庭では夏野菜（きゅうり、トマト、二十日大根等）を栽培し生長観察や水やりなどを行い、収穫の喜びとともに大変さも体験している。収穫物は給食にも取り入れ、自分で育てた野菜の美味しさを味わい、食材に興味を持てるようにし食育に繋げている。

また、当園では小規模園の特徴を活かし、未満児クラス１クラス、幼児クラス１クラスに分かれ年齢や発達に応じて好きな遊びができるように環境を整えている。保育室はままごと遊び、ぬり絵、ブロック、パズル、創作コーナー等、子供たちが自由に出し入れし、選ぶことが出来るようにし、子どもの「やりたい」「やってみたい」という気持ちを大切に活動している。

園庭では縄跳び、鬼ごっこ、ボール遊びを保育士と一緒に行い、園内の廊下には足跡を付け動物の真似をして動き、鉄棒や巧技台を置き、体を動かして遊ぶことができるようにしている。高齢者生活福祉センターとの複合施設 3 階には大きなホールがあり、雨の日などはドッチボール等を行い楽しく遊ぶことが出来る。

園児が少人数なので遊びや活動、散歩を一緒にすることが多く、子ども同士のやり取りを大切にし、友だちの気持ちや思いを受け止め、力を合わせて遊ぶことが出来るように見守りながら援助を行っている。

2）地域の人々との連携

当保育園の保育指針の一つとして「異年齢混合保育と地域の人や高齢者との交流の中で、豊かな人間関係を育てていきます」と掲げており、「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の基本方針にも「『育ちを支える』家庭・地域との連携」が掲げられ、その細目として「地域交流活動の充実」が挙げられ、「地域住民が子育ての知恵等を生かして教育・保育活動に参加することで、地域とともに子育て支援を行う教育・保育施設を目指します」等としている。また、「長野市子ども・子育て支援事業計画」では地域の学校教育等への協力についての姿勢も明文化されている。

地域の唯一の保育園であるので、地域の人々の園への関心は高く、地域で子どもたちを大切に育てている。散歩の途中では地域の方々が声をかけ温かく迎えてくれ、また、見守ってくれている。世代間交流の一つとし野菜の栽培の仕方を地域の方から教えてもらい、年長児は田んぼで田植えを経験し、文字を書く楽しさも教えてもらい、様々な方々の協力を得ながら多くの体験をしふれ合っている。地域には伝統行事や伝説などの多くの文化財があり、獅子舞などを保育に取り入れ、文化財にふれながら成長している。園の入る建物は高齢者生活福祉センターとの複合施設になっているので、行事の様子を部屋から見ていただいたり、訪問をして歌を披露したりと交流を深めている。

当保育園の事業計画や全体的な計画には、隣接の小中学校学校の児童・生徒との交流・体験学習、実習生・ボランティアの受け入れ、おひさま広場(園開放、育児相談)に来る親子との交流など、様々な人々とふれあうことができるようにしている。例年であれば小学校との相互交流なども行われているが、今年度は新型コロナのため自粛となっており、小学校の音楽会等にも感染症対策をとりつつ参加している。また、例年、世代間交流ということで併設の高齢者施設へ訪問したり利用者に園に出向いていただきふれあう機会が持たれているが、新型コロナ禍ということで自粛ぎみとなっており、今年度は感染レベルに合わせ職員の引率の下、子どもたちの歌やダンス等の発表をしている。例年とは状況が違うが、子どもたちは幅広く地域の人々とふれあう中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じている。

当保育園として地域における子育て支援に関わる活動が、関係機関との連携や協働、子育て支援に関する地域の様々な人材の積極的な活用の下で展開されていくことで、子どもの健全育成や子育て家庭の養育力の向上、親子をはじめとする様々な人間関係づくりに寄与し、地域社会の活性化へとつながっていくことを十分理解し、保護者や地域の人々と子育ての喜びを分かち合い、子育てなどに関する知恵や知識を交換し、子育ての文化や子どもを大切にする価値観等を共に紡ぎ出していこうとしている。

3) 少人数での保育の工夫

当保育園は園児も少なく、異年齢の混合保育を行う中で子ども同士の繋がりと集団生活でのルールの希薄化を考慮してその改善に向けて保育を行っている。全体的な計画の中に同じ公立のとがくし保育園との交流や小・中学校、地域の人々との交流を行い、社会性を学ぶ機会を取り入れている。職員は全園児の様子を把握し、手をかけすぎず、見守りながら個性を大切に、一緒に活動を行い、全職員が協力して保育に取り組んでいる。

長野市公立保育園として各園が年度の研究レポート作成に取り組んでおり、当保育園の令和3年度の研究レポートのテーマを「様々な環境の中でのびのびと自己発揮できる子ども～地域の人々・文化・自然と関わるための保育士の支援を考える～」とし、人数が少ない園で集団遊びが十分にできない、遊び等の中で出てくるアイディアや発想が限られてしまうなど、体験が限られてしまうことを課題とし子どもの関わることができる機会の洗い出しをしている。

「子ども・子育て支援新制度」に基づき新設された保育施設として「小規模保育園」が注目されている。制度上の小規模保育園では乳児保育がメインであるが、各自治体で保育基準を決めることができるため、地域の保育ニーズに合う質の高いサービスを提供することができるといわれている。

当保育園は制度上の「小規模保育園」ではないが保育士と子どもが関わる時間が長いため、家庭環境に近い状態で、子どもの性格・発達や保護者の子育て方針に応じた質の高い保育を行うことができており、また、地域のニーズに合わせた保育を展開している。そのため、職員が子どもと根気よく接するだけでなく、小さな変化を感じ取りながら保護者とともに素直に成長を喜び合っている。

今年 11 月には福井県の特別支援学校の文化祭で放たれた風船に運ばれた短冊が園庭に届き驚きと感動を味わった。子どもたち、特に年長児の二人はその気持ちを絵や写真でつづり手紙にして送り、その特別支援学校からも返事が届き嬉しい交流が続いている。子どもたちはその過程の中で福井県への興味を覚え、郵便局に出向き自ら料金を払うなど少人数保育ならではの貴重な体験をしている。

集団で行われる保育の利点としては、社会性が身に付くことであったり、自立が促されることだったりするが、個々で満たされることが少なくなるといわれている。日によって違う子どもの状態や体調に、細かく対応しきれないのが現実で、「抱っこ」といっぺんに3人にこられても、2人が限界であるという。

その点では、少人数の保育は安心してたっぷり抱かれている時間がもてたり、一人の世界でおもちゃを広げて遊べたり、話をじっくり聞いてくれ、そっと寄り添って見守ってくれる大人がいることで、子どもは満たされ、愛情を感じて大人への信頼が生まれていくのではないかと思われる。満たされる部分が多ければ多いほど、子どもの情緒は安定していき、家庭的な保育ができ、当園の保育は保護者からも好評をいただいている。

園児数が少ないため、保育室はゆったりとした雰囲気で、保育士一人に対する子どもの人数が少なく、子供の一人ひとりに目が向き、発達を捉えやすいので適切な援助ができている。保育士の気持ちにもゆとりがあり、安定した精神状態でいられるので、乳幼児期の子供たちにとっても穏やかな環境で過ごせるという面もあり、未満児担当、幼児担当の職員同士の連携が必要となることから、コミュニケーション能力が自然に磨かれており、また、園長や主任もフォローに回ることから保育士全員で全園児を保育することができている。

4)職員のチームワークの良さ

当保育園では職員間の相互理解の下、意見を交わし合う関係が形成され、それぞれがチームワークを高めていこうとする姿勢を保ち、全体の保育の内容に関する認識も深め、共に保育を行う喜びや展望をもって、組織として保育の質の向上に取り組んでいる。

当園として毎年度、業績評価及び保育所第三者評価の内容評価項目に準じた自己評価(年2回)を行っており、その結果を集計・分析し、自己評価の中での気づきや課題などについては職員会議で検討し、改善に向けて計画的に園内研修を実施し、職員自らの業績評価表の見直しをするなど、課題の解決に取り組んでいる。自己評価を通じて、他者の意見を受け止め自らの保育を謙虚に振り返る姿勢や保育に対する責任感を自覚するなど、組織の中で支え合って、学び合いを継続していく基盤が形成され、保育士としての専門性の向上も図られている。

現在、当園には3歳未満児と幼児の2クラス(組)があり、また、幼児については年齢別に分け別に活動する時間を設けている。日中の職員は園長も含め5名(給食担当職員除く)と、子どもの数、職員数共に少人数で、小規模園という特徴を生かし、一人ひとりの子どもの保育を振り返り発達の状況を共有し成長を見守り、園長、主任、職員、全員で子どもを育くむように双方向のコミュニケーションを取っている。また、毎週、水曜日には職員会が開かれ、更に、年1回、園長面談を行い、小規模園であるので必要な時には園長との相談を随時行うことができる。

職員のシフトは早番(7:30～)と遅番(16:30～18:30)になっており、代替保育士(公休・年休等)、休憩パート保育士も園長が市保育・幼稚園課と連絡を取りながら確保し、職員の仕事と生活の両立という面で休暇取得の促進、短時間労働の導入、時間外労働の削減などに取り組んでいることから、育児や介護、療養などの状況に応じて休暇が取得できるようになっている。

基本的に各クラスは一人担任であるが、幼児のぱんだ組には加配の職員が就いており、園長や主任が職員の研修時にはフォローに入り、また、幼児を担当していた職員が年度をまたぎ未満児の担当になるなど、クラス担任・非担任にかかわらずクラスの垣根を超えた園児への対応、保育への支援体制が柔軟に行えるようになっており、職員間の密な連携へとつながっている。

保育士としての専門性を高めるための内部研修や市としての研修、復命での外部研修についても職員同士お互い融通し合い日程を調整し、園内研修では係分担制を敷き内容を充実させるとともに、外部研修についても新型コロナ禍の中、職員の意思を尊重し、オンライン研修等への参加を促している。職員一人ひとりが課題を持って主体的に学ぶための研究会への自主参加についても互いに支援・協力し合っており、職員同士の信頼関係を築くとともに、共に学び合う環境を醸成することで当保育園としての活性化を図っている。

◇改善する必要があると思う点

1) 散歩などの園外活動での更なる安全への備え

当保育園は「信州やまほいく認定制度(信州自然型保育認定制度)」の普及型の認定園で6年目を迎えており、散歩など自然と触れ合う機会が多くある中、土砂災害ハザードマップを事務室に掲示し、危険個所を把握している。

子ども達が歩く「お散歩コース」は多岐に渡り、季節の変わり目等には必ず職員が下見に行き、安全を確認した上で散歩に出かけている。また、安全対策を強化するため「散歩、危険箇所把握マップ」を作成することで危険箇所を可視化し、園全体でその箇所を確認している。更に、散歩時には園児や緊急連絡先のリスト、応急手当品、笛、筆記用具、水の入った専用のリュックを携行し万が一に備えている。

新保育所保育指針では、その目標として、自然や生命などの事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うことが明記されており、幼児期における自然体験の重要性が謳われている。

自然の中では、不意の災害に遭うことも想定され、また、危険な動物、植物に触れることもあると思われる。ハザード(Hazard:危険:悪い結果になるか分からないが、その可能性があること。人や物に対して危害や損害を与える可能性のある現象、もしくは行為のこと)とリスク(Risk: 望ましくない出来事または状態になる可能性とその影響の度合いのこと)の違いを正しく理解し、体験活動の実施場所の下見を十分に行う中で、子どもにとって何が「リスク」となり、何が「ハザード」となりうるのかをイメージすることが大切であるといわれている。

今後、更に、保育所等の周辺の安全に関する情報を、保護者や地域住民、関係機関と共有し、危険箇所の確認を通じて得られた情報を全職員で共有し、危険箇所の一覧表や散歩マップ(目的地までの想定 経路、病院・交番・AED 設置場所等の情報を含む) の再作成、現地の写真の活用等の工夫を行うなど、事前の安全管理、活動中の安全管理、子どもの状況、安全指導のポイント、自然体験活動を始める前の事故と怪我への備え等のリスクマネジメント(安全管理)について更に研修を重ね、知識・スキルを向上させ子どもの安全に備えていくことを期待したい。

７　事業評価の結果（詳細）と講評

共通評価項目の評価対象Ⅰ福祉サービスの基本方針と組織及び評価対象Ⅱ組織の運営管理、Ⅲ適切な福祉サービスの実施（別添１）並びに内容評価項目の評価対象Ａ（別添２）

８　利用者調査の結果

長野県福祉サービス第三者評価事業評価結果取扱要領第２条第１項の規定により、有効回答者数が 10 人未満のため、非公開とします。

９　第三者評価結果に対する福祉サービス事業者のコメント

（令和　３年１２月２２日記載）

日々職員間で保育を語り、より良い保育を目指しているところですが、今回の第三者外部評価受審により、長野市の中長期計画、保育理念等に基づく保育園の役割や各種マニュアルに沿った対応、地域や保護者のニーズ、子どもの育ちの理解等様々な視点から保育を見直す機会になりました。また、客観的な視点に立って評価していただくことで新たに気付くことも多くありました。

評価結果に見られる園の利点あるいは特徴として、「周りの自然・環境を活かした保育」「地域の人々との連携」「少人数ならではの保育」「職員のチームワーク」があげられています。地域の保育園として何ができるのかを職員で話し合い、取り組んできた部分を評価していただき有難く思います。改善点として、「園外活動での更なる安全への備え」があげられています。自然保育を掲げ、活動を行っています。散歩先の下見の徹底しているところですが、さらに危険生物、害虫、有毒植物等の知識を持ち、それらの情報を職員が共有・周知し取り組んでいきます。「外部からの侵入に対する安全対策」については、毎月行っている避難訓練を見直したり、地域の方との連携をすることで安全対策を進め、保護者の方に安心してお子さんを預けていただけるよう取り組んでいきたいと思います。

この度、評価機関のコスモプランニング様には大変お世話になりました。

ありがとうございました。